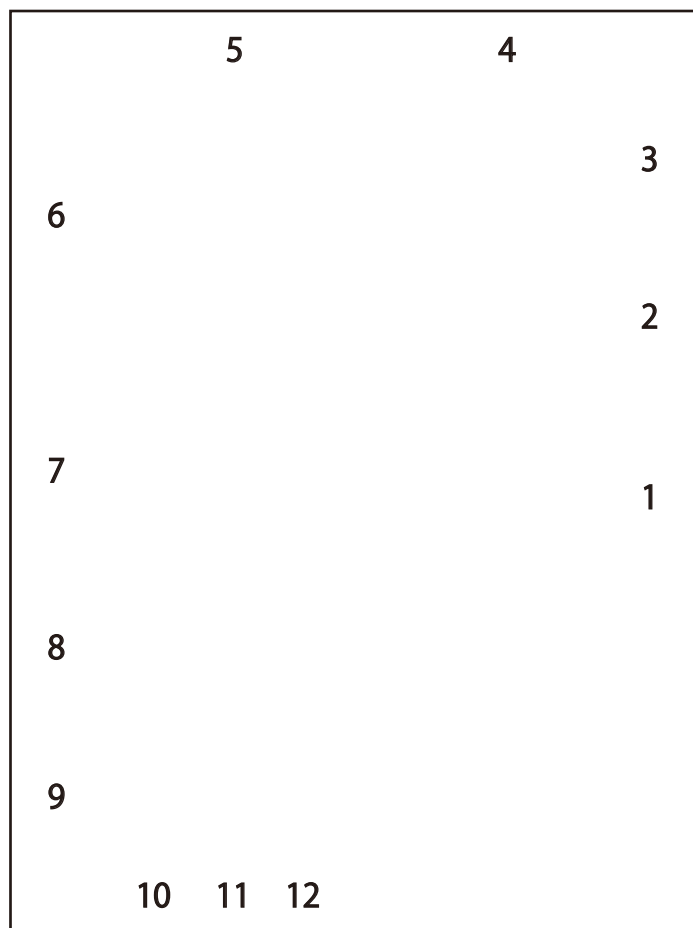


石をのせた船

3/20-31

11:00 - 19:00

Gallery C



- | | |
|-------------------------|-----------------------------------|
| 1. 「二枚の葉」紙本着彩, 2016 | 7. 「二姉妹」紙本着彩, 2017 |
| 2. 「光を綴るの素描」紙に色鉛筆, 2018 | 8. 「緑の光の脈」紙本着彩, 2018 |
| 3. 「光を綴る」紙本着彩, 2019 | 9. 「緑の光の脈の素描」紙に水彩とクレヨン, 2016 |
| 4. 「気晴らしと道草」紙本着彩, 2019 | 10. 「朝が来るまで静寂を聞く #3」ブオンフレスコ, 2016 |
| 5. 「石をのせた船」紙本着彩, 2018 | 11. 「朝が来るまで静寂を聞く #1」ブオンフレスコ, 2016 |
| 6. 「沼地」紙本着彩, 2018 | 12. 「朝が来るまで静寂を聴く #2」ブオンフレスコ, 2016 |

二年ほど前に一枚のレコードを買いました。アメリカ、シカゴのレコード会社が比較的最近出していたもので、70年代のアメリカの女性シンガー達の楽曲がオムニバス形式でおさめられていました。どの曲も（おそらくアメリカ国内でも）有名なミュージシャンのものではなく、教会やインディーズ・レーベルから発表され時代とともに忘れ去られたようなものだったそうです。レコードから流れてきた音楽は懐かしさと同時に新鮮な印象を受けました。

その楽曲群はどこか自分が作品で描きたいと思っていたムードに近い部分がありました。日々の中、ひとりの時間に見つける静かで豊かな感覚。全体に多幸感があり、目新しくないからこそ時代に流されない強さがありました。外で写生をしているときに捉える、植物の反復する形や、光によって変化する色彩を思い出しました。長くモチーフとして描いている自然は普遍的でありながら、観察すると様々な表情を見せ、時に物語性を感じさせてくれます。またモチーフと写生を交互に見比べながら、画用紙に線を引く単純作業は不思議と高揚感を生じさせます。

レコードから感じた内向性は神秘的な雰囲気をもち、写生のときに見ていた自然の印象と重なります。厳かな光と陰に岩絵の具や箔のきらめきを用いました。これらの画材は単なる絵画の装飾性だけでなく、自然を捉えた絵画空間に深い奥行きを加えるものであると考えます。植物や自然の風景は日常生活でも絵画のモチーフとしても見慣れたものではありませんが、描くことで改めて新鮮さを認識します。写生をしていた時の瑞々しい気持ちに再び出会える事を願って絵を描きました。

略歴

勢野 五月葉 SENO Itsuha

1989年京都府生まれ、2015年京都市立芸術大学大学院 美術研究科絵画専攻日本画修了、主な展示は2014年飛鳥 Art Village (奈良県立万葉文化館)、第1回続「京都 日本画新展」(美術館えき KYOTO)、2015年 ARTIST WORKSHOP @KCUA The Hundred Steps 成果発表 / SHOWCASE (京都市立芸術ギャラリー @KCUA)、2016年未来の途中のリズム - 美術・工芸・デザインの鋭 10人展 - (京都工芸繊維大学工芸資料館)